

CONSERVATION VOLUNTEERS Vol. 4

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）

告知 _____ リーダートレーニング研究会 p1

特集 _____ 災害支援とボランティア p1

連載 _____ 環境保全ボランティア活動と若者の自立支援 p4
人材は「育成」か「成育」か？ p5
理事長コラム p6

お知らせ _____ ボランティア情報ほか p8

場数+理論+対話で
リーダーを学ぼう！

告知「リーダートレーニング研究会」開催！

志賀 壮史（JCVN事務局、特定非営利活動法人グリーンシティ福岡理事）

安全管理、様々なボランティアとのコミュニケーション、活動の段取り、作業の指示など、安全で楽しい環境保全ボランティア活動には「リーダー」の存在が大切です。

これまでJCVNは数多くのリーダー講座や他団体への講師派遣を行ってきました。その中で蓄積した「リーダー」やその「リーダーシップ」についてのノウハウを整理し、より多くの方に向け発信・共有していくために、公開型の「リーダートレーニング研究会」を開催します。

JCVNの講座テキストを土台に、意見交換しながらリーダーについて学びを深めていきます。

- ・より安全なボランティア作業を目指したい
- ・リーダーやリーダーシップについて考えたい
- ・次世代のリーダーを育成したい

という方はぜひご参加を！お待ちしております。

第1回「リーダーシップ」

と き 平成25年1月15日 18時半～20時半
と ころ 福岡市NPO・ボランティア交流センター
(通称あすみん/福岡市中央区大名2-6-46)
進行役 朝廣和夫 (JCVN副理事長)
志賀壮史 (JCVN理事)
参加費 300円 定員 20名程度
申込み 電話・ファクス：092-215-3966
メール：jcvn@greencity-f.org

今後の予定

第2回「現場リーダー」 _____ 2月中旬
第3回「チームビルディング」 _____ 3月中旬
第4回「リスクマネジメント」 _____ 4月中旬
第5回「地域をどう巻き込むか？」 _____ 5月中旬
※以降、定期開催の予定。

特集 災害支援とボランティア

■九州北部豪雨を受けて

小森 耕太 (JCVN 理事、山村塾事務局長)

7月14日の豪雨災害以降、本当に多くの方々に応援いただいております。10月末までに災害ボランティア延べ1,689名、活動日数68日間。笠原復興基金246件6,266,396円の支援をいただいております。たくさんの支援に感謝と責任を感じる毎日です。おかげさまで復興へ向けて少しずつ前に進んでいます。

私たちが活動する福岡県八女市黒木町笠原地区(372世帯、1,163人)は谷あい広がる棚田や茶畑、山々がとても美しいところでしたが、今回の災害によりあちこちの道路が寸断され、一時は孤立状態となり、農地や家屋に甚大な被害がもたらされました。黒木町内で約3,300箇所の農地が被害を受けており、そのほとんどが笠原地区です。今後、笠原を離れる人、農業をあきらめる人が多く出てくるのではないかと心配しています。

しかし、不運の中にも幸運なことがありました。元小学校校舎が交流施設として整備、活用されていたこと。入浴や調理の設備が整っていたほか、山村塾のボランティアが滞在中で食料品ストックや布団60組を備えていたため、一時、80~150人が緊急避難をしたときも十分対応ができたことなどです。また、これまでに関わりの無かった黒木町内、八女市内の多くの若者が、災害ボランティアに続けて参加してくれたことは大きな喜びでした。

今回がおの森を中心に、避難者や災害ボランティアの受け入れがスムーズにできたのは、合宿スタイルの里山保全活動や都市農山村交流に取り組んできたこれまでの経験やノウハウ、人脈によることが大きく、これもJCVN設立とその後の連携のおかげだと思っています。梅雨が明けかけた7月21日に災害ボランティアの募集を開始し、翌日の7月22日には、遠くは宮崎から地

元八女市までの22人のボランティアが集いました。ボランティアが来てくれたことで、何をどうしたら良いか分からなかった地元の方々も、次第に前を向いて動き始め、ボランティアへの支援要請は日に日に増えていきました。



山間部は災害により道路がダメージを受けることも多く、行政を含む外部との連絡が途絶えるリスクを抱えています。しかし地域に根ざしたNPOなどの活動団体があることで、非常事態が起きた際の外部の協力者との連携やコミュニティの支援が可能になります。そして今も尚、たくさんのボランティアや支援の輪が広がっており、きっとそれらをつなぐことが地域の復興支援になるでしょう。

復興を目指してがんばるのはもちろんですが、JCVNを通じて今回の経験を様々なところに還元できればと思っています。今後ともどうぞよろしくをお願いします！

黒木町笠原の近況

<https://facebook.com/kouta.komori>

■リスク社会に必要な平時の備え、被災、そして地域の創造へ

朝廣 和夫 (JCVN 副代表・九州大学芸術工学研究院 環境・遺産デザイン部門)

急速に移り変わりつつある社会の変容の中で、地域やNPOをはじめ、学校の教育・研究も様々な

取組が模索されています。前回、「平成24年7月九州北部豪雨」の復旧活動を行う山村塾の話に

触れました。東北を含め、今、私たちは「リスク社会」の中で強くしなやかに生活を送る社会づくりが必要だと言われています。様々な予測されるリスクに対し社会技術を結集して対策を実装することも大切ですが、一方で、地域に加え、様々な人のつながりを形成することが、これからの安全・安心のために大きな力を発揮する場として期待されています。それは、農山村も都市も、急速な縮小社会の中にあるからです。JCVN に参画されている皆様は、市民活動をベースにしながら、地域と共に産・官・学・民の多様なつながりを形成され、活動を展開されています。被災してからの連携は強い動きとなりますが、問題は、平時、そして被災後の中長期的な地域の自立再生に向けて、どのような連携のもとに支援活動を継続できるかにあります。今回は、2012年8月に岩手県釜石市で調査¹⁾した被災後のNPO支援の変容を紹介することで、災害支援の視点から、平時の活動の位置づけを考えてみたいと思います。

この調査の目的は、被災直後から現在までの被災者の生活とNPO支援の変容を時系列に整理し、持続的な地域の自立支援の課題を明らかにすることです。対象は、東日本大震災で被災された釜石市片岸町の鶴住居仮設居住者(K氏、Y氏)と、被災直後から支援に入り現在も継続している北海道の「NPO法人ねおす」です。聞き取り調査は2012年8月7日～10日にかけて実施しました。片岸町は約200世帯、約50名を越す住民の地域であり、家屋の全壊が免れたのは50世帯、約35戸でした。生活の変容は避難先により下記のI～IVに分けることができます。

- | |
|--|
| <p>I : 2011年3月11日～3月13日 一次避難所
屋根のかかる5か所：稲荷神社本殿横の長床、裏山の高台の山小屋、他</p> <p>II : 2011年3月13日～6月20日 二次避難所
上栗林集会所（約100名、最大約150名）</p> <p>III : 2011年6月20日～2012年8月9日現在
約200世帯の住民は30か所の仮設住宅に分散</p> <p>IV : 今後 災害公営住宅など</p> |
|--|

片岸町の方々は、被災直後一次的に、神社等に避難しましたが、大槌からの山林火災の危険が迫ったため、約7km上流の上栗林集会所等に避難されました。この地区の方々の避難生活の特徴は、3月14日に事務局を立ち上げ、支援物資の受払、厨房の賄い、犠牲者・行方不明者等の名簿づくりを行い、また、健康保持のために1日の時間割を決めて集団生活を営まれた事でした。NPOは、釜石市出身の職員の家族安否確認のために3月12日に北海道を出発し、3月13日に、この上栗林集会所に到着し支援活動を開始しました。ここで、次ページに、片岸町の避難類型とNPOの実施した支援プログラムの変容を図として示します。

災害直後の一次避難は住民の自助と共助を中心に行われ、二次避難所では、情報収集に基づく物資の調達・配給や移動手段の支援など、物理的な生活環境の支援が行われました。次に、子供の居場所づくりやデイケアなど、人との交流の場づくりによる心のケア活動に移り、外部ボランティアの受け入れ態勢が整った段階で瓦礫撤去などの生活環境の整理を中心とした支援活動が開始されています。仮設住宅に移る頃になると、避難者の仕事場づくりが必要となり、漁業支援や食関連、ボランティアへの被災の説明ツアーなどへシフトしています。現在は、これらの活動に加え、地域資源調査が開始され、今後の支援活動の検討が模索されています。詳細は、NPOの報告書を参照ください²⁾。

この調査での一連のヒアリング活動を通し、地域の中心課題は「地域コミュニティの継続・再生」にあると考えました。この片岸町の人口は被災前の6630人から被災後約4600人に減少しました。その減じた約2000名の内、実に1418人が社会減でした。住居の問題もありますが、多くは通勤・通学の為に、都市周辺の仮設住宅への移動となったからです。今後、地域の復旧の中で、物理的な生活環境だけでなく、これらの人の繋がりを取り戻すことができるかが大きな課題とされています。被災前の平時と被災後の中長期的な復興を考えるならば、環境保全活動を通じた人の繋がり作りが、要の一翼を担うのではないのでしょうか。私たちは活動を展開すると共に、これらの活動を時系列の観点で検証し、個々のプログラムの役割を明確化し、実施できる人材の育成を進める事が今

後の使命と考えます。それらの人々の繋がりは、平時の為であり、もしもの緊急時の備えにもなるのです。

なお、本調査は平成 24 年度（財）交流協会の助成支援を得て、「日台被災コミュニティにおける自立復興」というテーマで、台湾側（李宜欣、陳玉蒼：台湾実践大学）、日本側（福留邦洋：東

北工業大学）の協力のもとに実施しました。

- 1) 朝廣和夫, 李宜欣, 陳玉蒼, 福留邦洋(2012), 釜石市片岸町被災者の生活復旧と NPO による支援活動の変容に関する事例報告, 平成 24 年度日本造園学会関西支部大会研究・事例報告発表要旨集, p39-40.
- 2) 233days 2011年3月13日~10月31日ねおす被災地支援活動, NPO 法人ねおす, 2012.3.

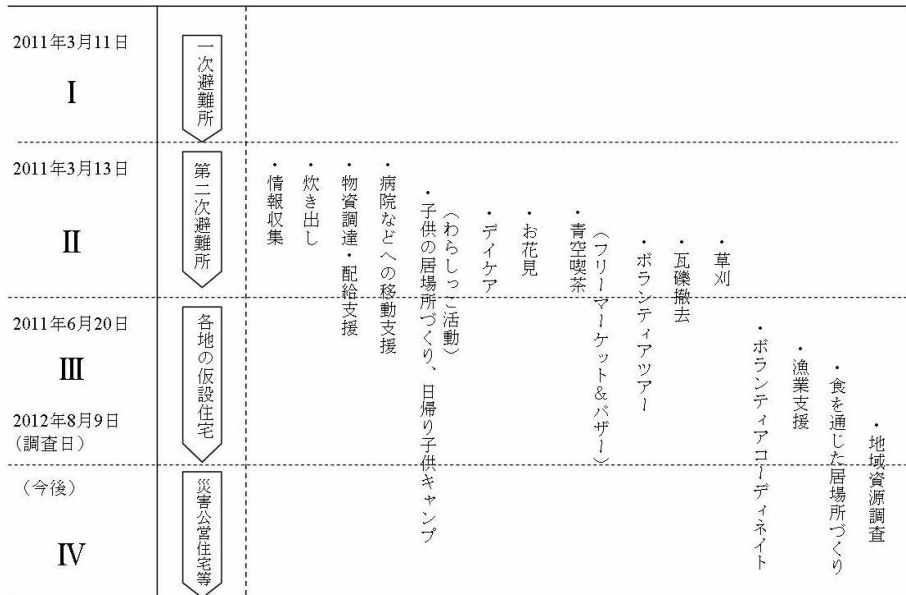


図 釜石市片岸地区住民の避難復旧過程とNPOの支援活動展開図

連載

JCVN理事による経験とノウハウの詰まった連載コラム！

■環境保全ボランティア活動と若者の自立支援（4）

～若者の自立支援団体と、活動を一緒に作る 環境保全活動の位置づけ～

塚本 竜也（JCVN 理事・特定非営利活動法人トチギ環境未来基地理事長）

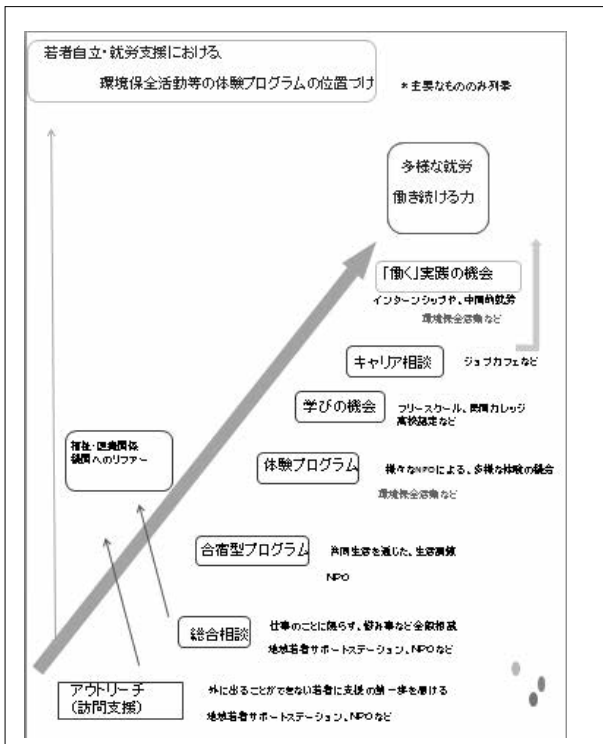
若者自立支援団体を利用する若者といっても、一人ひとり、状況も、状態も、困難の種類も、程度も異なるため、一括りにすることはできません。当然その人の状態にあった支援とうまくつなげていく必要があります。例えば一人での外出も困難な若者に、いきなり就職のための面談の練習をしても成立しないわけです。その人が今できることを判断し、必要な経験や身につけるべきことを整理し、段階的に支援していくことが大切です。

一般的に若者支援活動を行う団体の間では、大きく分けて、次ページの図のように段階を整理し

ています。例えばひきこもり状態が長く、外出が困難な若者へは訪問支援から入ります。相談（これも様々な種類ありますが）を経て、生活の改善が必要な人は、合宿型プログラムを利用したりします。グループ活動や社会体験の穴を埋める必要がある方は、それに応じたプログラムに参加をしていきます。

環境保全活動の出番は概ね2回あります。

一つは、体を動かしたり、他の人と一緒に何かに取り組んだり、グループ活動が必要な段階にある若者たちとの活動です。こちらは知り合いの中



でペースをゆっくりし、できる限りわかりやすい単純な作業を行います。声を出すことなども目標にはいります。「できた」という小さな成功体験を積めるようにします。

もう一つは、就労に向けての最後の段階、インターンシップのような形で、現場での作業をより実践的に行う場面です。こちらは、若者だけでなく、地域の方やほかの団体の方など、知らない人と一緒に作業し、指示されたことを効率的に丁寧に行っていく、より仕事の現場に近い状態での訓練です。作業の後は、作業報告書を書いたり、やったことをまとめたり、次回ももっとうまくやるための振り返りなども行います。

このように環境保全活動の現場も、若者の状態に合わせたプログラム作りや運営を行うことで、多様な若者に必要な経験の機会をつくることができます。

■人材は「育成」か「成育」か？（４）

～コンポストで変わる子どもたち、育てよう生活力～

平 由以子（JCVN 理事・特定非営利活動法人循環生活研究所事務局長）

この数年、先生の協力の下、学校教育でコンポスト体験学習が成果を上げています。「生ごみって何だ？」。初日の子どもたちの答えは「くさい」「汚い」「気持ち悪い」。実習に入り、生ごみを入れるときも「くさい、くさい」と大騒ぎ。最初に段ボール箱の中に入れる基材「もみ殻くん炭」独特の木酢の香りも「くさい」。普段の暮らしでかがないにおいは、何でもかんでも「くさい」という言葉に集約しているのです。

昔は窓を開けると季節のにおい、台所からは魚を焼くにおい、漬物を漬けるにおいなど多くの生活臭がありました。それが今や、消臭や抗菌グッズが大人気。「無臭生活」をしている子が圧倒的なのです。ところが、1カ月後に子どもたちに会うと、「温度が上がったとき鼻にツンとするにおいがした」などと、においに関する表現が約30倍にも増えているのです。「最初は気持ち悪いと思ったけど、生ごみが土に戻って植物の役に立つのが分かって楽しくなった」「微生物ってすごいやつだ」などの言葉が次々です。たった1カ月の体験活動でも多くの発見や経験から学び、生きた知識として身に付いています。子どもたちが生

ごみを学校に持ち寄ったため、お母さんが生ごみのない快適な暮らしを経験し、コンポストに興味を持ち始めます。

便利で合理的で、自然と分断された日常の中で育った今の子育て世代。モノに対する価値観だけでなく、地域での人とのかかわり合いも薄れ、生活観や教育観も変容しています。子どもが人間として生まれ、社会性を身に付ける最初の訓練の場は家庭です。ちょっとだけ手間をかけるコンポストがある暮らしに取り組み、そこで生まれる会話を子や孫と家庭で楽しむのも面白いですよ。



■ 理事長コラム（1）

～アカマツ林の復元・再生とマツタケの再生～

重松 敏則（JCVN 理事長・九州大学名誉教授）

アカマツ林とクロマツ林は、日本人にとって馴染み深い原風景の構成要素であり、生活に密着した林でもありました。クロマツは名のごとく幹が黒く、潮風や塩分に抵抗性があるため、主として海岸沿いに分布し、東北地方以南にある数々の浜辺の白砂青松の松原も、全てクロマツ林です。これらは主に江戸時代に、後背の農地や村落を海からの潮風や飛砂から守る「防潮林」「防砂林」として、営々と植林・育林されてきたものです。

一方、アカマツは名のごとく幹が赤く、内陸に生えるものほど赤みが鮮やかな傾向があります。海岸からあまり離れていない場所に生える個体は幹肌が黒っぽく、「合いグロマツ」とも呼ばれます。

アカマツ林と言えば、すぐに思い出されるのがマツタケです。今でもキンモクセイのほのかな匂いが漂う時季や、稲が色づき始める時季になると、「そろそろマツタケが生えてきているのでは」と胸がときめきます。これは幼少年時代に、母方の里である愛媛県の山里のアカマツ林で、祖母とマツタケ狩りを楽しみ、採集本能を満喫したからでしょう。マツタケの発生時季は稲刈りや取り入れの時季と重なることから、祖母も忙しいため、小学校の2、3年生にもなると1人でアカマツ山に登り、わずかに落ち葉が持ち上がっている場所などを探り、発見と収穫に嬉々としたものです。時間の経過を忘れて熱中するのですが、すぐにカゴ一杯の成果と香りに、意気揚々と帰宅し、祖父母を喜ばせました。

伯父や叔母も農作業の合間を縫って、マツタケ狩りに出かけ、収穫物が庭に広げた^{むしろ}蓆に山のように盛り上げられます。とても食べ切れないので、この時期を見計らって町からやってくる商人に買い取ってもらうのですが、伯父によれば、正に二束三文で労力に見合わない不満やるかたない様子でした。しかし、マツタケご飯に、焼きマツタケ、土瓶蒸しとマツタケ三昧で、季節の味覚を堪能できたのは、マツタケ狩りの体験も含め、今となっては幸せだったと思います。

ところで、毎年マツタケが生える時季が近づくと、アカマツ林の持ち主は、自分の持ち山の境界に縄を巡らせ、暗黙の「立ち入り禁止」とする慣習があります。地方によっては、この期間のみは

持ち主からマツタケ狩りの権利が剥奪され、地区の人々で権利の競りが行われるそうです。自分で競り落とさない限り、山主といえども一歩たりと山に入れられないというのも、その地方の慣習とはいえ気の毒な気がします。

「立ち入り禁止」の禁を犯すのが、いわゆるマツタケ泥棒です。私の幼少年時代にも、血気盛んだった伯父が、マツタケ泥棒を捕まえた悲哀のドラマがあったのですが、話が長くなるので、またの機会に割愛しましょう。

さて、里山というと多くの方は、クヌギやコナラ、アベマキのような落葉樹、また、九州の低標高地では、これらにスダジイやアラカシ、タブノキなどの常緑樹が混交する、広葉樹の雑木林を思い浮かべることでしょう。しかし、かつての里山の多くはアカマツ林で占められていました。特に都市の郊外や集落の周辺、それに瀬戸内海沿岸や島々（いずれも海岸付近はクロマツ）もほとんど全てと言ってもいいほどアカマツ林が広がっていたのです。

都市の近郊や集落周辺は古来から主にエネルギー源として強度に森林が伐採利用されてきました。瀬戸内海沿岸には塩田が広がり、そこで濃縮された塩水を煮詰めるのに大量の薪や柴などの燃料が必要だったのです。こうして森林から過剰な収奪が繰り返されると、林地は痩せ、表土や落ち葉層も失われて乾燥した土壌条件となります。広葉樹はこのような条件では生育が困難で、例え生育したとしても低木にしかありません。ところがアカマツは、貧栄養で乾燥した条件でも適応して生長できるのですが、これにはこのような条件が生存に適したマツタケの菌糸とアカマツの根が菌根を形成し、アカマツに活力を与えていたことも大きく関係していると思います。しかも、アカマツ林が生長して、やがて伐期に達して伐採されても、天然下種更新（伐採しても所々に伐り残した母樹や、隣接のアカマツ林から種子が供給されて天然更新する）で、容易に再生できるのです。

アカマツも再生が困難ほど収奪されると草地や裸地のハゲ山となります。実際に筆者が小学2～4年生ころ、愛媛県の丹生川駅から予讃線に乗り（蒸気機関車）、香川県の高松から宇高連絡船に

乗り継いで、山陽本線で大阪まで行き来したところ、沿線の里山はほとんど全てアカマツ林で、山頂部や尾根部はハゲ山になっているのが至る所に見られました。大阪の近郊の里山もアカマツ林やハゲ山ばかりで、春にはピンクやオレンジ色の野生ツツジが咲き乱れていたのが思い出されます。

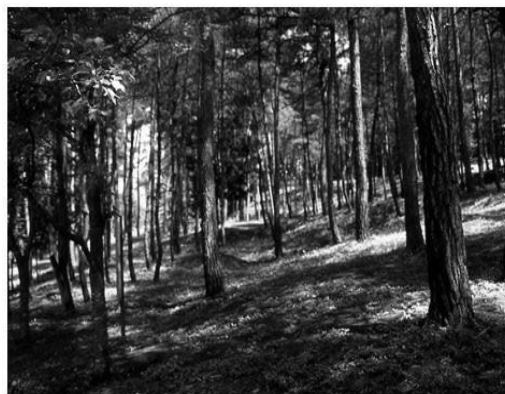
鴻巣山や油山など福岡近郊の里山も、多くがアカマツ林だったと言えます。八女市黒木町笠原地区で、終戦直後に米軍が撮影した航空写真の判読と、地元の古老からの聞き取り調査からも、このような山間部の地域でもアカマツ林が多くを占めたことが確かめられています。

ところで、アカマツ林には次のような3つのタイプがみられました。①山麓や緩傾斜地の土壤水分条件が良好な場所に、建築材用に造林される15~25mの高林で、林下に薪炭用の低林として7~8m程度の広葉樹の雑木林が広がり、これらは15~20年周期で伐採更新されている。柴刈りや落ち葉掻きが行き届いているので、60年くらいで択伐されるアカマツも健全。②山の中腹などの比較的土壤水分条件に恵まれた場所で、工業用の薪炭用に30年程度の周期で伐採下種更新されるもので、林床に生えてくる柴草は定期的に刈り取られ、落ち葉掻きもされるのでアカマツも健全。③尾根部や過去の過剰収奪で土壤が痩悪化している場所に成立するアカマツ林で、さすがのアカマツも生長は良好ではない。林床植生はほとんど見られず、松葉が散らばっている程度だが、アカマツは健全。

アカマツ林の他にも、広葉樹の雑木林や竹林もありましたが、いずれも管理が行き届き、明るく

開放的な林間環境だったので、アカマツ林も含め、花鳥風月を愛で、遊山の場として人々に親しまれていました。しかし、昭和30年代に入り高度経済成長と燃料革命が始まると、アカマツ林の管理・利用はされなくなり、次第に下層植生が密生し、落ち葉層が厚くたまるようになりました。こうなると痩せ地でアカマツの根と共生し、菌根を形成して土壤中の養水分を補給していたマツタケの菌糸は勢力を無くし消えてゆき、マツタケも生えなくなりました。こうしてアカマツの活力が低下しているところに、マツノマダラカミキリがマツノザイセンチュウを媒介し、松枯れが生じる場所となったのです。かつては被害木がでるとすぐに伐倒して燃料にしていたのですが、もはや管理する人もなく放置されたため、松枯れは劇的に広がり、里山からアカマツ林はすっかり姿を消してしまったのです。そして、低林の雑木林や林床に生えていた低木類が大きく育ち、現在の広葉樹が密生する里山に変貌したのです。筆者が高校生ころまでは、初夏に里山にでかけるとハルゼミが盛んに鳴くのが聞けたのですが、アカマツ林が消えて後、久しく聞いていません。昨年の初夏に湯布院の近くに残るアカマツ林で、何十年振りかにハルゼミの鳴き声を聞くことができ、たいへん感激しました。

今でも里山の痩せ尾根などにアカマツ林の名残りを見ることができますが、しっかり手入れを再開して、かつて日本人に親しまれたアカマツ林の風景やマツタケの再生を是非とも復元・存続させたいものです。(本稿の後半は筆者の「このすくらム4：かつての里山の様子」を引用しています)



柴刈りや落ち葉掻きが行われたアカマツ林の風景（左：薪炭用の若齢林 右：建築材用の壮齢林）

お知らせ

ボランティア情報ほか

●ボランティア情報

八女市黒木町・笠原復興プロジェクト
災害ボランティア募集（主催：山村塾）

平成24年7月14日の豪雨災害による被害を受けた住民、農家への支援を行う災害ボランティアを募集します。

おかげさまで7/22～11/31の約4ヶ月で79日間活動し、延べ1965名の方々にご参加いただきました。多くの方々を支えられて活動を継続することができています。ありがとうございます！

◆とき（平成25年1月の予定）

1月14日（月・祝）、15日（火）、
24日（木）、26日（土）、27日（日）

◆集合

9：00に八女市黒木総合支所の駐車場

※現地へは乗合またはスタッフの用意した車両に同乗していただきます。

※公共交通機関は、堀川バス（羽犬塚 8：12発→黒木 9：03着）をご利用ください。お申込み時に送迎希望とお知らせください。

◆スケジュール

9：00 八女市黒木総合支所駐車場に集合
笠原地区へ（約30分）

10：00～15：00 作業
※1時間の昼休憩含む

15：00 片付け、ミーティング
八女市黒木総合支所へ移動

16：30 解散

◆主な活動内容

- ・棚田な茶畑などの農地の復旧作業
- ・地域の農家のお手伝い など

◆募集対象

- ・中学生以上（中学生は要引率者。中高生は学校及び保護者の同意書が必要。）
- ・活動のルール、マナーにご協力いただける方

◆持ち物

汚れてもよい服装、長靴（必需品）、保険証、飲み物、弁当、タオル、帽子またはヘルメット、ゴム張りの作業軍手、防寒着、保険料280円
※着替えがあると便利です。

◆申し込み方法

参加2日前までに以下をお知らせください。
氏名、住所、電話番号、携帯電話（あれば）、参加希望日、ボランティア活動保険の有無、所属やグループ（あれば）、活動内容の希望（あれば）、宿泊希望の方はスケジュール、黒木バス停からの送迎の必要
※宿泊も可能です。詳しくは下記まで。

◆連絡先・申込先

〒834-1222 八女市黒木町笠原9836-1

えがおの森内

メール：sannsonn@f2.dion.ne.jp

電話・ファクス：0943-42-4300

事務局携帯：080-8562-4558

HP：http://www.h3.dion.ne.jp/~sannsonn/

FB：https://www.facebook.com/kouta.komori

笠原復興基金・ご寄付のお願い（主催：山村塾）

＜郵便振込口座から＞

加入者名：山村塾

口座番号：01740-4-88441

※通信欄に笠原復興基金とご記入下さい。

＜銀行から＞

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：一七九（店番：179）

口座：当座 0088441

※銀行からお振込みされた方は、お名前とご住所orメールアドレスをお知らせ下さい。

CONSERVATION VOLUNTEERS 4

■発行日：平成24年12月15日

■発行頻度：年4回

■発行：JCVN

■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202

NPO法人グリーンシティ福岡内

tel/fax: 092-215-3966

e-mail: jcvn@greencity-f.org